

〔引用文献〕

氏家千恵 一九九二 「昔話の保存部分と自由部分に関する一考察

—言語アキストの伝承における△解釈行為▽の意味—」、福田晃

編『日本文学の原風景』三八四—四〇五頁、三弥井書店。

武田正 一九九五 『昔話の発見—日本昔話入門—』岩田書院。

武田正 二〇〇〇 『山姥登場—昔話学への招待—』置賜民俗学会。

藤田省三 一九八二 『一九八一』[或る喪失の経験—隠れん坊の精神

史—]『精神史的考察』八—四五頁、平凡社。

柳田国男 一九九〇 『一九三一』[世間話の研究]『柳田國男全集（ち

くま文庫）』九・五一—五三〇、筑摩書房。

アラン・B・チネン（羽田詩津子訳） 一九九六 『一九八九』[成熟

のための心理童話（下）]早川書房。

（かわもり・ひろし／甲子園大学）

一 はじめに

現代の民話

米屋陽一

シンポジウム・□承文芸の未来

柳田國男は『遠野物語』序文に「目前の出来事なり」「要するにこの書は現在の事実なり」と記した。「現代の民話」＝「現代民話」を解こうとするときに、現代民話の「現代」と「目前の出来事」「現在の事実」は、かなりの部分で重なり合うことに気づく。

ひとつのハナシを近・現代史、近代化という流れの中に置いてみると、ハナンの歴史的な背景や歴史的な状況を押さえる必要性に迫られる。と同時に「現代」とはなにか、との問い合わせ軋拗につきまとう。

人びとは、日常生活の悲喜こもごもの中から、戦争、環境・公害問題、天変地異などの特殊な体験を通してハナンを発生させる。語り手の直接体験は、一人称語りの事実談として出発し、いずれは三人称語りに移行する。その一人称、三人称の語りは伝承民話（昔話

・伝説・世間話など)と重なり合つたり、刺激しあつたりしながら、

あるいは文字言語(文学作品)と交流したりしながら、現代民話と

して生成していくのだろう。

その場合、いくつかの試練がある。ストーリー性、文芸性、地域性、虚構性、同時代性、普遍性などのいくつかをクリアーするといふ試練である。

それらの試練を経るのか、経ないのか。そのことによつて、現代民話は近い将来、伝説化・昔話化していくのか、あるいは消滅していくのか、その運命は左右されるに違ひない。

(この文章はシンポジウムの「発言要旨」である。)

二 経緯

「現代民話」を意識的に取り上げた出発点は、繰り返し引用されている木下順二の「民話管見—劇作家の立場から—」である。

事実、まだはつきりと形は成さないながら、「現代の民話」の種が僕たちの社会の中に生れて来つつあることは疑いがない。その種は、突飛なようだあるいは「税金」であるかも知れない。「再軍備問題」であるかも知れない。「昔話人事件」であるかも知れない。僕は僕なりに戯曲を書く人間としての立場から、これらのテーマの素材とも云うべきもの—それらは確かに複雑であり巨大であり強烈である—を、現代という決定的な瞬間ににおいて生々しく定着させたいと思う。それは僕たちが僕たちの祖先の遺産を継承し、そこから新たな伝説をつくり出して行くためにどうして

も必要なことなのだ。

(「文学」一九五一年五月号・岩波書店)

この発言の延長線上には、一九五五年四月にインド・ニューデリーで開かれたアジア諸国会議への提出資料「日本における民話の問題」(「文学」一九五五年六月号・岩波書店)がある。これは、「民話の会」が作成し、会議に出席する日本代表团の一人の木下順二に託したものである。いくつかの項目に分かれているが、その中の「現在の問題点と困難な諸条件」という項の7に注目したい。

数において非常に豊富な日本の昔からの民話も、近代に入つてから急速に減びて行く状況にあるが、それに対して本格的な蒐集がなされず、減び行く一面で新しい民話が次々と生れて来ているにもかかわらず、その採集がほとんど試みられていない。このことは、今日の社会において、民話が現実に果してゐる機能を不明確にしている。

このような流れの中で、山代巴の「現代の民話」(「新日本文学」一九五四年三月号、五六六年「民話の発見」大月書店・所収)の発表があり、大きな反響を呼んだ。それを受けけるような形で、民話の会は「現代民話」の採集と記録について(「民話」五八年創刊号・未来社)を掲載し呼びかけた。にもかかわらず、答えは数少なかつた。創刊号・二・四・七号に連載した西郷草彦のみであった。しかもそれはソ連・ロシアの「現代民話」の紹介であった。

「民話の会」の活動や出版物を衝撃的に受け止めていたのは松谷みよ子であった。以後、松谷は六〇・七〇年代、伝統的な伝承の語りの再話作品と併せて「現代民話」の再話作品を積極的に生み出し

てきた。そして吉沢和夫の「現代の民話に必要なのは普遍性です」という言葉と出合い、本格的に「現代民話」の収集に力を注ぎ始めた。それは、これまでの「現代民話」の方法とは視点が異なつていた。

松谷は「現代民話考」連載の第一回目に次の文章を載せた。

一九五二年以降の「現代の民話」への重点は、いかにこの巨大な現代社会の中ですぐれたテーマを創造し、作品とし、民話として伝え得るかという点に置かれていたようだ。

これからは、もう一つ、べつの目が必要になりはしないだろうか。創り出そうとし、積極的に伝えようとしている「現代の民話」とは、どこかで関わりなく、そうした意図も全くない民衆によつて語られている「現代の民話」をも、みつけだし、より出し、その普遍性を探る仕事がそれである。そしてこの二つがつながりあり、確認されていく中で、「現代の民話」がすこしずつその本来の姿を現わしていくのではなかろうかという思いである。

〔民話の手帖〕創刊号・民話の研究会＝現在の「日本民話の会」

・一九七八年・蒼海出版

「現代民話考」の連載はテーマ別に続き、一九八五年から九六年までに「現代民話考」(全十二巻・立風書房)が刊行された。十八年間の歳月を要した。これはとりあえずの完結で、「現代民話考」は形をかえて現在も続いている。「今昔物語集」をはるかに越える分量の「現代民話」およびハナンの種の数々である。

松谷は、NHK人間大学テキスト『現代民話—その発見と語り』(一九九六年・日本放送出版協会)の「まえがき」に「民話とは、

人間が生きてあるかぎり、ふつふつと生まれるものではないかと思うのです。あなたが聴く耳を持ち、語る唇を取り戻したとき、まさと現代民話が存在する実感を得られるでしょう。気がつけばあなたは語り手でもあるのです。」「現代民話は歴史の証人でもあるのです。」と記している。

吉沢和夫は、「人魂、河童、幽霊、化物、狐や狸に化かされた話といった類の民話の中に、公害、戦争、近代化等々といった歴史的・社会的状況に根ざした話と重なり合い交錯し合う形でひとつの民話の世界をつくり上げてきた民話が沢山ある」としたうえで、「現代民話」という歴史的・時間的な軸を視点として統一的に把握していくこととする対象のつかみ方に私は共鳴する」という姿勢を示している。そして、「近代化の歴史の中で失つてきたものの復権を考えることと、今日の情況の中で新しく生まれてくる民話とその語りに眼を開いていくことは、決して別個のことではないと思います。」と松谷みよ子と響き合う発言もあり、民話の現在・現代民話の現在の問題をより鮮明に提起しているといえる。

こうした刺激は日本民話の会の例会に反映され、一九九六年四月から九七年七月まで「現代民話」をテーマに運営された。報告者(報告順)は、吉沢和夫／川村善一郎／武士田忠／洪谷勲／高津美保子・岩倉千春／常光徹／江藤文夫／松谷みよ子／米屋陽一／色川大吉の十一名。その後、討論会が連続四回開かれた。報告と討論会の内容は、「聴く・語る・創る」第六号『現代民話の諸問題』(一九九八年十一月・日本民話の会)として刊行された。また、人間大学テキストを経た松谷の『現代民話—あなたも語り手、わたしも語り

手一(一一〇〇〇年八月・中公新書)も刊行された。

三 近い昔

柳田國男の『遠野物語拾遺』の「題目」には「近い昔」があり、一八八、一三三、一三六の七話が収録されている。幕末・安政期(一八五〇年代)から昭和二年(一九二七)に至る事実談、体験談である。

「三三六」を読む。「昭和一年一月二十四日の朝九時頃には、此地方を始めて飛行機が飛んだ。」「村人のうちに飛行機を見たことは勿論、聞いたことも無い者が多かったから、プロペラの音が空に響くのを聞いて動転した。」とある。この日の佐々木喜善の体験・見聞を聞いた柳田がまとめた一話である。

二〇年前に千葉県市川市真間の伊藤一氏(明治三五年生まれ)から飛行機をはじめてみたハナシを聞いた。「大正二年の五月ごろだったかな、所沢から市川の東練兵場に、飛行機が三機、はじめて飛んでくるっていうんでね、学校の先生に連れられてね、練兵場にいったんですよ、喜んでね。」「われわれの頭の上きたときはね、バリバリバリバリって音すんでしょ、おつかない音すんでしょ、はじめてきくんだから。」「柏のほうからも東京からもおおぜい、飛行機はじめてみるんでね、とにかくたいへんなさわぎですよ。」「練兵場には、井戸水がないでしょ、だから、だれだかちょっとおぼえてないんですけど、水を入れたおけかついでね、茶わん一ぱい一錢で売つたんですよ。そうしたところが、売れる、売れる、わたしら

も一ぱい一錢でのんだんですけどもね。うまいんですよ。」というふうに、あの日の「(はじめ)少年の感動や人々の様子は、亡くなれる直前まで繰り返し語られた。

日露戦争後、日本はフランスから「四台の飛行機を仕入れ、四三年末に公開試験を行なった。」最初四日間を滑走試験にあて、よいよ五日目になつた。「滑走三十メートル、フワリと空中に浮いた。」そして「七十メートルの高空に達し、練兵場を一度旋回して着陸した。」「飛んだ! 飛んだ! バンザイ!」⁽⁴⁾当時東京府の人口百六十万のうち、約五十万人(延べ)が見物に来ていたという。と紀田順一郎は記している。

明治末年、大正初期、昭和初期の飛行機をはじめてみた人々は、その日の感動をその人なりに家族や友人知人に熱っぽく語つたに違いない。人々のこの日の感動は共通しているといえる。柳田は、東北地方・岩手県遠野の「遠い昔」からの伝承世界を意識する一方で比較的新しいハナシを捉え、現在の世相としての「近い昔」を置いたのではないか。柳田の意図はそんなところにあったのかも知れない。

四 歴史的事実とハナシの発生

近・現代史の流れの中に、千葉県浦安市当代島の前田治郎助から聞いたハナシを並べてみる。治郎助は、明治四年(一九一二)一月二十四日生まれ、平成六年(一九九四)十二月六日死去。江戸前・東京湾の漁師を引退後、民俗芸能の「お洒落保存会」を結成し、その

代表を長らく務めた方であり、自宅内の不動尊の講元でもあった。

ジロスケ（屋号）の家には、漁師仲間、信仰仲間、お洒落（芸能）

仲間が年中出入りしていたから、当然沢山のハナシが転がり込んで

きた。亡くなるまでの十余年間に聞いたハナシの数々である。

・御台場の泥かつぎ（幕末のころのハナシ）

「御台場の泥かつぎ／しゃけで／まんまと食つて／一錢五厘」つてな、唄あつたけどな。おらん爺さんが安政六年（一八五九）の生まれなのね。御台場築いたのが、安政元年だからね。だからおらんギスケの爺さんの男親がちょうど盛りの時分だった。「陸地から泥を舟へと積んで向こうへ行くとね、検査する人がいんだとよ、役人が。その役人に見せんだとよ。満船になつてるか。」「ところが、中には利口なやついてね。こすからいやついてね。」「一回見せたのを

（6）

・ジョウは書いてば書かねだよ（明治時代のハナシ）

「日露戦争の時、この村から出征した背の高い立派な人がいたんだつて。その人には、リョウキチとシロキチって男の子が二人いたんだけど、男親が出征中に、女親が男の子を産んだつて。そのことを戦地の夫に知らせようと思つて、上の子に、「ジョウ（リョウキチの呼び名）、ちゃん（父親）に手紙出してくれ」つて言つたとよ。「おう」つて言つたけんね、いくら言つても書いてくれねえので、

「しょんねくて、弟のシロキチに頼んだつて。」そしたらね、「ジョウは書いてば書かねだよ。赤ん坊の名はサイムだよ。シロとおつか

は待つてるよ」つてね、手紙出したんだつて。」

・大正六年の大津波（大正時代のハナシ）

「わたし、大正六年（一九一七）に小学校一年だつたの。その時に、この辺に津波が来たのよ。その津波は相当大きかったの。浦安で十四人亡くなつたの。船橋でも五十何人亡くなつたの。その時にね、当代島の鎮守さま、稻荷神社の鳥居のちょっと奥にね、太い松の木が一本立つてたのね。それが津波の勢いとね、風でね／その松の木が二本倒れちゃつたのね。田んぼの中へと。／十日か十五日過ぎてからね、松の木が自然におつ立つちやつたんだね。わたしらそばだから知つてんですよ。／「あれ、松の木起きちゃつたよ。稻荷さまが、神さまが起こしちやつたかんべ」つて話なんだ。」

・遭難・火柱（昭和初期のハナシ）

「昭和五年十一月一日、おれ十九の時だ。遭難しただよ。その時に、六人死んじやつてよ。その船の船頭だけ一人生きただよその日の天候はよかつただよ。よかつたけどね、途中からね、ナライの突風だよね、雨風がすごかつたよ。それで遭難しただよ。」

「おれ、あの時、しひたてにいつただけどね。ナライの雨と風でてんすごいだよ。しひたて、もう少しで終りつてどこになつたとき、そうなつちやつただ。／へ十五か十六だよ。六人じやねこの村の遭難じや大きいやね。だから、六地蔵っていうお地蔵さんたつてあんだよ、善福寺に。若えだけに、ほんとにかわいそうだつたよ。みんな凍死だよ。」

「その人ね、しょんべんつて起きてね。あの時分だから、便所外だから、垂れてんとね、ちょうどあの辺でね、こうやつて一、三回

見たつて。ちょうど火柱ポーッと上がんだとよ。／「なんだろかな」つて、見たつて。そしたら、その何日か後に、それ（船長の家）火事になつちやつたつて。みんな、「思いだんべ、六人の」つて。自分は冷たい思いしないでしょ。』

・浦安大空襲（昭和・戦中のハナシ）

『いちばん最初やられたのがね、昭和十九年十一月二十七日。その時は、あたしは、警防団のね、灯火管制、交通整理の班長つてね、警防団の幹部してたの。／その鎮守さまの拝殿の前にみんな立つてたの。立つてたとこへと落ちちゃつたの、爆弾が。それで、上で破裂したでしょ、ですから、第一ポンプ班長の増田八郎つて人は即死しちやつたの。そして、消防部長の尾頭政雄つて人は左足とられちゃつたの。』

『昭和二十年の二月十九日にこの辺に爆弾が落つこつてね。その時に五人死んだのよ、すぐそばで。防空壕のそばへ落つこつたんだけど、そのわきつかわ、土もりになつてなんだけども、その落つこつた地点は穴になちやつて、人間は上へとあがちやつただよ／それでこんだ落つこつたから体中がみんな破損しちやつてた』

『この小さな土地でもね、昭和十九年と二十年の二回の空襲で六人死んでんの。それと片足とられたのと、当代島の空襲二回、怖かつたですよ、ほんとに怖がつた。』

・慈悲地蔵のご利益（昭和四十七年以降のハナシ）

『昭和四十七年（一九七二）にね、その一角へとね、一坪借り建つてあんけどね。／ある人がね、「どうもこの一角に住んでる人間が、災難や不幸続きた」つて。「だからどつかへお地蔵さまでも

建てたらどうか』つてゆう話が出たわけだ。／「そうだね」つてことになつて、そえで三日にわたつて町会を開いただよね。／そえで地蔵さま建てただ。』

『さらし五、六反買つてきてね、それで全部巻いて、建立してそれから、今の善福寺の住職に来てもらつて、それで入魂式やつたわけだ。開眼供養つてゆうのね。その時にさらしを外したわけよ。そいんど、おかつ婆さんかなんかね、「その外したさらしを頂かしてくれ」つてことになつて。／「有難い布だからね、産婦があつたら産婦にね、頂かせんべ」つてわけで／腹帶んしてやつただよ。したくね、不思議とそれ安産なんだよ、みんなね。それ誰に伝わるとな、頼み行くんだよね。』

五まとめ

前田治郎助は、どこどこの爺さんは安政何年生まれだ、どこどこの婆さんは文久何年生まれだというふうに、幕末の元号で生まれた歳を記憶していた。あるいは、今生きていたらあの爺さんは百二十五歳だと、あの婆さんは百十二歳になるというような表現もしていた。ほんやりした記憶に対しでは、先輩に聞いてみるからといって、次回訪ねたときには必ずといつていいほど明らかにしてくれた。千葉県浦安・当代島のムラを中心とした治郎助の幼い日からの忘れることのできぬ体験・見聞・伝聞の数々は、自身のコトバとして表出しハナシとなつた。それはムラコトバであり、ムラバナシでもある。

治郎助というひとりの人間の浦安・当代島のムラといふ一地域を中心

に据えたこれらのムラの歴史物語を聞くと、百年前後という長い時間帯が一個人の一単位として連續と続いているのに気づかされる。現在という時点では、治郎助の中にハナシが同時存在しているのだ。それらのハナシはムラビトたちも保持している。つまり、治郎助の特殊なハナシではなく、ムラ・ムラビトたちの普遍的なハナシとして共有しているということだ。あるムラ・ムラビトたちの認識は「遠い昔」に対する「近い昔」であり、それは「現代民話」として位置付けてもさしつかえないのではないか。

千葉・浦安の歴史的事実、口頭伝承のハナシをわずかではあるが提示した。ひとつつのムラにおける普遍性は、日本列島各地に住む人々の共感を呼ぶ場合が多々ある。いわゆるハナシの普遍性である。このあたりに「現代民話」という用語を使用する意義のひとつがあるように思われる。

しかし、どう考へても百年間のハナシをひとくくりにして「現代民話」と呼ぶには抵抗がある。「現代民話」と呼ばれて久しい「偽汽車」「密造酒」「タクシー幽霊」等は、すでに古典的なものになってしまった。現在からみてかなり時間的に経過したハナシは、思い切って「近代民話」とでも呼び替えたらどうだろうか。伝説的な「現代民話」は「伝説」、昔話的な「現代民話」は「昔話」として分類してもいいのではないか。例えば浦安で語られた世間話（事実談・体験談）の「肝試し」「牡丹餅は蛙」や「飛んでもふぐ」等は「現代民話」であるとともに「昔話」でもあるともいえる。「現代民話」あるいは「現代民話」を定義づけることははなはだむつかしい

が、ほんやりとしたものは見えてきている。

近年、かつてのムラ・ムラビトたちからのハナシの発生とはまるで異なる形でハナシが発生し、超高速で全国に伝播してゆく。この大量生産されたハナシの数々を「都市伝説」「現代伝説」と呼んでいる。日本民話の会の例会・討論会の参加を経て「現代民話」への視点と都市伝説・現代伝説への視点とは異なっていると、とりあえずの結論を出した。もちろん、重複する部分を諒解したことだが。つまり、それぞれの対象とするハナシに対するむかい方、切り口、方法論はさまざまなものであつてもいいのではないか、というこ

とである。

同じく例会・討論会を経た武士田忠は一九五〇年代「民話の会」「民話運動」の経験者とそれ以後の世代との認識の違いを明らかにした上で、⁽¹³⁾「討論がかみ合わなかつた理由のひとつとして関連づけて述べている。このことは、口承文芸・民話にかかる戦後生まれの人たちの共通認識に近いものなのかも知れない。

そこで、現時点での「現代民話」にかかる問題点のいくつかを挙げてみたい。

・どのようなハナシ・話群を「現代民話」と呼ぶのか。

・「現代民話」の「現代」の時間的・歴史的な範囲はどこまでなのか。
・「現代民話」と「世間話」・「現代民話」と「現代伝説」「都市伝説」・「現代民話」と「昔話」「伝説」との重複や関係をどのようにとらえるのか。

・「現代民話」を口承文芸資料として位置付けた場合に、どのような方法で記録するのか。

これらの問題点をないがしろにすることなく、同時存在として

九八九年）に拠る。

（2）吉沢和夫『民話の心と現代』（白水社、一九九五年）に拠る。

（3）『ジエット機とゆうれい』「日本むかしばなし23」「解説（拙稿）」
（日本民話の会／ボプラ社、一九八一年）に拠る。

（4）紀田順一郎『近代事物起源事典』（東京堂出版、一九九二年）
に拠る。

「現代民話」や珍奇なハナシ、怖いハナシ、不思議なハナシ、笑え
るハナシおよび、ハナシの種は生活の中から次々に生まれ山積み状
態である。これらの話群の中から、現在という時点でどのハナシを
どう選び、主体的にどう継承するのか、負の遺産をどう継承するの
か、検討を重ねなければならないだろう。

かつてのムラは崩壊している。人間関係も希薄になつてきたとい
われている。高齢化・少子化が進んでいる。そういう現在を見据え
た上で、新しい語りの場の設定が各方面から求められている。しか
しあが家・隣近所の家という空間・語りの場の設定はかなり困難で
ある。したがって、地域に結び付いた学校・幼稚園・保育園・図書
館・地域文庫・家庭文庫・公民館・児童館・コミュニティーセン
ター等の空間が語りの場になつていくだろう。また、地域外では、
企業・各種団体・サークル・グループの場やさまざまなイベントを
通しての場もだいじな語りの場になつていくだろう。新たなる語り
の場は、新たなる継承の場になつていくに違いない。

注

（1）吉沢和夫「現代民話への視角—『東奥異聞』から『現代民話
考』まで」『民話の手帖』第三十九号（日本民話の会／国土社、一

（13）武士田忠「現代民話論の課題」『日本民話の会通信』第一四七
号（日本民話の会、二〇〇〇年一月）参照。

（よねや・よういち／國學院大学）